

緒方さんとホプキンス

清 水 一 嘉

1993年に緒方さんが愛大に赴任してきたとき、私は『愛大通信』につぎのような紹介文を書いた。

緒方さんは日本における有数のホプキンス学者である。ホプキンスは19世紀英国のカトリック詩人。その詩の特殊性と用語の難解さはよく知られている。緒方さんの数多いホプキンス論のなかで代表的なものは「メタファーの詩人ホプキンス」「ホプキンスのかなしみ」「ホプキンスの詩の明暗」「ホプキンスとイエズス会」などである。これらの論文の背景にあるものは、個と全体主義的な理念とのあいだで揺れ動くホプキンスの姿である。個というのは詩人が尊重する13世紀の神学者ドゥンズ・スコウタウスの個性原理にもとづく「インスケイプ」の理念をいい、全体主義というのは詩人が属するイエズス会の精神のことをいう。これら両者のはざまに立たされたホプキンスの苦悩からさまざまなかなしみにみちた詩がうまれた。ホプキンスの近代性もまたここから導き出される。「人間の心の最奥における分裂葛藤を自ら感じ、さまざまな独創性技法を用いて如実に表現した」詩人のなかに「時代を先取りした先駆者」を発見するのである。定説をくつがえす斬新なホプキンス論であり、詩人に深くコミットする氏の姿は感動的でさえある。このような姿勢はホプキンスの詩の翻訳にも遺憾なく発揮され、氏自身のことばによる氏自身の心情の吐露とってよいようなユニークな作品ができあがった。

それから10年たち、このたび緒方さんは退官を迎えることになった。その間、氏が書いた論文はいくつかあるが、いちばん最近のものをここに紹介しておこう。これは『英語青年』に掲載された「インスケイプの喪失」というもので、要約するとほぼつぎのようにな

る。

氏は前説をくり返す。ホプキンスの詩の中心的モチーフである「インスケイプ」の概念は時代やイエズス会の外的な要因によって危機に直面し、詩人はそれを克服しようとして分裂・苦悩する。インスケイプというのは「内に内在する姿」「あるものが個としてそのものの中に持っているそのもの固有の姿」のことであり、ドゥンズ・スコウタウスの「これであること」という個性原理に基づくものである。そのインスケイプが2つの面で喪失の危機にさらされる。

1つは、自然におけるインスケイプの喪失である。ヴィクトリア朝の繁栄がもたらす開発と自然破壊は、自然のありのままの姿（インスケイプ）の破壊をもたらす。それはわが身を引き裂かれるような痛みを詩人に与えるものであった。

2つ目は、魂におけるインスケイプの喪失である。人生のさまざまな挫折を経て、詩人のインスケイプは自然界のインスケイプから自分自身の心のインスケイプへと変容する。ついには詩人であること自体がインスケイプを意味するようになる。しかし、詩人であることは、そこにわが身を置くイエズス会の「個の滅却」の理念とまっこうから対立することになる。ミューズと神、個とイエズス会のはざまに立たされた詩人はかなしみ、苦悩する。——このような分裂葛藤のなかから、斬新な技巧を駆使するホプキンスの詩が生まれた……。

これでわかるように、緒方氏は個 vs イエズス会というモチーフをくり返し追求する。くり返しながらも、しかし、氏の説くインスケイプ議論はかつてのそれよりいっそう深化していることがわかる。

ところで、一生をホプキンス研究に捧げた緒方氏は氏自身の問題としてホプキンスをどのように内面化するのであろうか。今後のおたのしみといったところだが、じつは氏自身の最近の詩のなかにその一端はすでにあらわれている。たとえば、つぎの一編。

頑なに

頑なに拒む心にも

あなたは目を注いでおられるのですか

頑なにあらうとしているわけではありません

それが性になってしまったのです

かなしい性だと人は言うかもしれません

緒方さんとホプキンス

でも拒まれた心には
拒むことしかできないのです
拒まれ拒むことの果てしない繰り返し
それでいていつも手を差しのべている
かなしみの極み かなしみの果て
本当はそんなものはありはしないのだ
この性がかなしみを生み出しているだけなのだ
その限りかなしみを癒してくれるものなど
ないものと心得るべきだろう

あなたは一体
僕の心をどうしてしまいたいのですか
(緒方登摩第三詩集『独標』)

緒方氏の「かなしみ」はホプキンスの「かなしみ」に通じるのである。